
転校生の彼女

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校生の彼女

【Nコード】

N3888T

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

ある朝、僕は遅刻しそうになり、禁止されている自転車で登校した。その途中で隣のクラスに転校してきたばかりの彼女に会った。これがきっかけとなり、二人の関係は急接近。

1. 転校生の彼女

1. 転校生の彼女

自然に目が覚めた。目ざまし時計が鳴る前に。こんなことは初めてだ。なんだか今日は気分がいい。改めて時間を確認する。

1時45分…。

「い、1時？ やばい！ 止まってる」

目ざまし時計が止まっている。携帯を手に取り時間を確認する。8時10分。僕は布団を蹴飛ばし、慌てて制服を着る。部屋を出て階段を駆け下りた。

「なんで、起こしてくれないんだよ…」 母親に文句を言ったが反応がない。そうだった。母親は町会の婦人部の旅行で昨日から居ないんだった。そんな時に、頼りの目ざましが止まってしまうなんて…。

学校までは普通に歩いて20分ほど。本当は自転車通学は認められていないけど、背に腹は代えられない。今からすっ飛ばしていけば何とか間に合うかもしれない。

カバンを前のかごに放り込んでペダルをこぐ。うまい具合に信号にも引っかからなかった。この分ならどうやら間に合いそうだ。もう少しで学校に着くというところで、必死で走っている女子生徒を見つけた。

「あれっ、あの子は…」 たしか、最近、隣のクラスに転校してきた子だ。結構、可愛いとボクのクラスでも評判になっている子だ。「かわいそうに。転校早々遅刻かよ」 もう少し時間に余裕があれば後ろに乗せてあげてもいいと思ったけど、ここでスピードを落としたらボクもやばくなる。ここはスルーだ。後ろ髪をひかれ

る思いで彼女の横を通り過ぎた…。

その瞬間、何かが自転車を引っ張るように急にペダルが重くなった。僕はバランスを崩して片足をついた。後ろからかごの中にもう一つカバンが放り込まれた。振り向くと、彼女が荷台に腰掛けていている。その両手が僕の腰に回されると彼女が叫んだ。

「早くしろ！ 遅刻するぞ」

何が何だか分からないまま、僕は必死でペダルをこいだ。学校の正門が見えてきた。今にも門が締められようとしているところだった。僕は気合を入れてペダルをふんで加速し、正門をすり抜けた。間一髪セーフ！ 彼女は自転車を飛び降りると、一目散に校舎へ駆け込んだ。

「おい、宮本！ 自転車通学は禁止だぞ。しかも二人乗りなんてもつてのほかだ。ちょっと職員室まで来てもらおうか」

そして、僕は生活指導の杉田に首根っこを掴まれて職員室へ連れて行かれた。

「あ、あのう…。遅刻ではないですよね？」 僕は杉田に恐る恐る聞いてみた。

「アウト！」 杉田は右手を高々と突き上げて叫んだ。

「そ、そんなー…」

あの転校生のおかげで、今日は散々な1日だった。元をたどれば目ざまし時計が止まっていたのがそもその原因なんだけど。

下校時間になったので、職員室に自転車の鍵を取りに行った。

乗らずに押して帰ることを条件に自転車を返してもらった。自転車を押して校門を出ると、女子生徒が一人、僕を待っていた。彼女だ。

「朝はありがとうな。おかげで遅刻せずにすんだよ」 改めて彼女の顔を見ると、評判通り可愛い顔をしている。だけど、男みたいなこの言葉使いはマイナスだな。そんなことを考えていると、彼女がカバンを僕の自転車のかごに放り込んだ。

「早く乗れよ。ちよつと寄つて帰りたいところがあるんだ。そこまで乗せて行ってくれ」 彼女はそう言うと、早くも荷台にまたがろうとしている。

「ちよ、ちよつと待てよ。君のせいで僕がどんな目に遭ったか……」
僕が文句を言い始めると、彼女は乗るのをやめて僕の前に立ちふさがった。そして、いきなり僕にキスをした。僕が呆氣にとられてみると、彼女は僕から自転車を奪い取り、行ってしまった。

僕は自転車で立ち去る彼女を茫然と見送った。

「あつ！ 僕のカバン！」 僕のカバンは自転車のかごに入ってたまだ。僕は慌てて、彼女のあとを追った。

2. 彼女っていったい…

2. 彼女っていったい…

いったいどこへ行くんだろう？　かなり走った。　我ながら、こんなに持久力があるとは驚いた。

大きな通りの交差点に差し掛かった時、ちょうど信号が赤に変わった。　彼女も自転車を止めた。　追いつくチャンスだ。　そう思った瞬間、彼女は信号が青になっている方へ右折した。　僕が交差点にたどり着いた時に、その信号が赤に変わった。　僕はそのまま横断歩道を駆け抜けようとしたが、走り出した車にさえぎられた。　そして彼女を見失った。

ヘトヘトになって家までたどりついた。　僕はそのまま部屋のベッドに転がった。　少し、ウトウトして目が覚めたら、外はもう暗くなっていた。　急に腹が減った。　父親は一昨日から海外出張。　そして、母親も婦人会の旅行。　今夜は一人だ。

「あっ！」　急に目の前の現実気が付いた。

「今夜のメシはどうすりゃいいんだ？」　冷蔵庫を覗いてみた。

食材はいっぱい詰まっている。　しかし、そのまますぐに食べられそうなものは入っていない。　料理なんてやったこともない。　財布の中には千円札が1枚。

「出前でも取るか…」

そば・中華・すし・宅配のピザ…。　何にしよう…。　そんなこ

とで悩んでいると呼び鈴が鳴った。

インターホンの画面に映っていたのは彼女だった。　僕はとっさに呟いた。

「な、なんで！」　すると、スピーカーから彼女の声。　「自転車

返しに来た」 僕は玄関のドアを開けて外に出た。

彼女の料理の腕前はなかなかだった。冷蔵庫の材料で生姜焼きとポテトサラダ。そして、卵スープをあつという間に作ってくれた。どれも、その辺のファミレスで食べるより美味かった。

「さて、本題に入ろうか…。聞きたいことが山ほどある」 食べ終わった僕は、台所で洗い物をしている彼女に向かって言った。

「どうぞ。何でも聞いてくれ」彼女は洗い物の手を休めずに答えた。 さて、何から聞こうか…。

「名前は？」

みずはらゆうき
「水原優希」

「みずはらゆうき？」 なんか聞いたことがあるなあ…。 僕がそう思っていると間髪いれずに彼女が付け加えた。

「昔の野球漫画の主人公じゃないよ。 字が違うんだ。 あっちは勇気のゆうき、私は優勝の優に希望の希。 野球好きのオヤジが字を間違えて付けた」

そういえば、おやじの書斎にその漫画あったなあ。 ガキの頃読んだ覚えがある。 それで覚えてたんだなあ。

「次は？」 彼女が聞いた。 「次は何が聞きたいんだ？」 そう繰り返して、手を拭きながら僕が居るダイニングの方へやってきた。 洗い物が終わったようだ。

「ありがとう」 僕は取り合えず、料理とあと片付けまでしてくれたことに対して礼を言った…。 つもりだった。 すると、彼女は「そうか。 じゃあ、帰るな」 そう言ってカバンを取って出ようとした。

「ちょ、ちょっと待てよ」 僕は慌てて彼女の手を掴んだ。 はずみで彼女が僕の方によろけた。 そのまま二人はソファに倒れ込んだ。 その瞬間、彼女の平手が僕の頬にとんできた。

「何するんだ！ このスケベ野郎」 そして、彼女はそのまま、僕

の胸ぐらをつかんで続けた。「親が居ないのをいいことに女を連れ込んで乱暴しようなんざ男の風上にも置けねえな」

何という誤解だ。それに、この気の短さはなんなんだ。どこからこうなった？ 連れ込んだ？ 冗談じゃない！ 勝手に上がり込んだのは彼女の方だ。出前のメニューを見て何か作ると言ったのは彼女の方だ。僕は何も頼んでいないし、乱暴しようだなんて……。僕は彼女に睨みつけられながら考えた。そもそも、彼女のおせっかいから始まったんだ。そして、ぼくは食事のことでお礼を言ったのに、彼女は質問が終わったんだと思ったに違いない。だいたいちよつと考えれば分かるだろう。あの時点で、まだ名前しか聞いてないじゃないか。

僕は事の成り行きを彼女に説明した。とても、彼女が納得するとは思えなかったが。しかし、彼女は素直に謝った。

「わりい！ どおも、おやじに似たようで、気が短くて。取り合えず、事情は分かったから、早く続きをやろうぜ。私もどうせ、今日は家に帰っても一人だからゆっくり付き合ってやるぜ。メシも食わせてもらったしな」

彼女の切り返しの早さと、急展開に僕は全くついていけない。いったい、どうなるんだ？

3. 昨夜の出来事

3. 昨夜の出来事

目覚ましが鳴って、僕はいつも通り目を覚ました。頭がガンガンする。ゆっくり着替えて居間へ降りる。母親が居ないので朝食はあきらめよう。少し早いけど、このまま学校へ行くか…。

玄関で靴を履こうとして気が付いた。見慣れない靴が一足ある。一回り小さなローファー。

「えっ！」　ボクはすぐに気が付いた。彼女の靴だ。そう思った瞬間、キッチンの方から声がした。

「おい！　朝飯も食わないで学校に行くのか？」　水原優希の声だ。ボクは慌ててキッチンへ向かった。どうやら、朝食の支度をしているらしい。

「な、何でいるんだ？」　驚いた顔の僕を見て、彼女はケロッと言つてのける。

「何言ってるんだ？　昨日、泊めてもらったじゃないか。覚えてないのか？」

「と、泊った？」　なんで？　どういうことだ？

「なんだ、覚えてないのか？　そう言やあ、ブランデー一杯飲んだらすぐに酔っ払って寝ちまったもんさ」　そう言つて彼女はフライパンを持ち上げると、パンケーキをくるっと回転させて裏返した。

悔しいけど、そんな彼女を見て“可愛い”と思った。

彼女が作ったパンケーキはうまかった。コーンポタージュスープはインスタントだったが、スクランブルエッグは僕が好きなトロツとした仕上がりに出ていた。味もちろん文句なし。ボクは食事をしながら、必死に思いだそうと努力した。しかし、何も

思いだせなかった。食事を終えると、二人で学校へ行った。

二人並んで歩くことに照れくささを感じつつも、優越感に浸っていた。

「だけど、片桐かたぎりって寝癖悪いな」いきなり、彼女が言う。僕はドキッとした。

「寝癖？一緒に寝たのか？」思わず、口走った。

「おい、それも覚えてないのか？もったいない！あんないいことしたのに」彼女は笑った。

「いいこと？僕、君になんかしたのか？」正直、僕はかなり焦っている。

「ヒ・ミ・ツ」彼女はそう言うのと僕の腕にしがみついてきた。そして、僕に顔を近づけてこう言った。

「一夜を共にしたのに、“君”はないだろう！優希と呼んでくれ」僕は恥ずかしくて顔から火が出そうになったが、彼女の言葉に従うことにした。正直、悪い気はしない。どちらかといえば、かなり嬉しい。

学校に近づくにつれて、他の生徒たちも次第に増えて来た。こんなところを知っているヤツに見られたらなんてからかわれるか…。嫌な予感的中するもの。前歩の路地から宮部保みやべたもつがひょっこり顔を出した。彼の家の方角からして当たり前なのだが、今日に限っていちばん会いたくないヤツに会ってしまった。

「あれれ？そこで美女と一緒に歩いているのは、俺の大親友の片桐光一かたこういちじゃないかな？」案の定、宮部は僕達にちょっかいを出してきた。

「美女だなんて、こいつは正直なヤツだなあ」優希はそう言うとき、スコーンと宮部の頭を引っ叩いた。

「なんだ！こいつ、いきなり…」宮部は頭を抱えてうずくまった。

「おい、優希、やり過ぎだぞ」　そう言っ僕は優希をたしなめたが、言ったそばから恥ずかしくて、つい、優希から目をそらしてしまった。

「お前ら、一体何なんだ？　それにいつから付き合ってるんだ？

こいつってば、隣のクラスに転校してきた噂の彼女だろう？」　宮部はボク達の前にまわりこんで僕と優希をジロジロ見る。

「あとで説明するから、早く学校へ行こう。遅刻するぞ」　僕は何とかごまかそうとして話をそらした。

「分かった。絶対だぞ」　宮部はそう言くと、先に走って行った。

僕は、結局学校の靴箱まで腕を組んだまま歩いて行った。

「なあ、昨日のこと。あとでちゃんと聞かせてくれよ」　僕は優希にそう言っ靴を履き替えた。優希は聞こえたのか聞こえていないのか分からないが、手を振りながら教室の方へ消えて行った。

4. ペントハウスでピクニック

4. ペントハウスでピクニック

4時間目の授業中に胸ポケットに入れてある携帯電話が鳴った。メールだ。鳴ったと言ってもマナーモードだから音はしない。こっそり取り出し確認した。優希からだった。

『昼休みに屋上に来い。昼飯一緒に食おうぜ』 昼飯？ そう言えば、母親が居ないから、今日は弁当がないんだ。まさか優希が弁当を作ってきたのかな…。

終了のチャイムが鳴ると、僕は屋上へ行った。

「おーい、こっちだ」 優希の声。声がした方を見ると、ペントハウスの屋根の上から優希が顔をのぞかせている。ボクは脇にあるタラップを登ってペントハウスの屋根に出た。レジャーシートを敷いて優希が座っていた。

「待ちくたびれたぞ。早く食おうぜ」 優希が紙袋から重箱の弁当と水筒を出した。

「いつの間に？ それにこのシート…」 ボクもチャイムが鳴って速攻で上がってきたというのに、シートまで敷いて待っているなんて、もしかして4時間目をさぼったのか…。

「細かいことは気にするな。ちっちゃい男はモテないぞ」 そう言って優希は重箱を広げた。

今日は風もなく、いい天気だ。ピクニックにはもってこいだな。僕はそう思った。優希の料理の腕前は昨日の夕食と今朝の朝食で実証されている。重箱に入った弁当のおかずはどれも絶品だった。

「それじゃあ、そろそろ本題に移るか」 優希が言った。

「本題？」

「ああ、昨日の続きだ。色々聞きたいことがあるんだろう？ 昨日はすぐに寝ちまったからなあ」 そうだ！ そうだった。昨日は結局名前しか聞けなかった。

「よし、じゃあ、最初に教えてくれ！ 昨夜、君は僕と一緒に寝たのかい？」

「そうさ。居間のソファじゃ寂しいじゃないか」

「それで、その… その時、僕は君に何かしたのか？」 ボクがそう聞くと優希はクスクスと笑いだした。

「男と女が一つの布団で寝たんだ。することは一つしかないだろう」 ボクは一瞬で血の気が引いた。

「そ、それはつまり、セ、セ、セ…」 僕がその先の言葉を言えないでいると優希が代わりに答えた。

「バカだなあ！ セックスなんかするわけないだろう」

「えっ？」 僕はちよっと拍子抜けした。

「お前、案外スケベなんだな。健全な高校生がやることといったら添い寝に決まっているだろう」 優希はそう言うと、笑いながら僕の頭を軽くはたいた。

「添い寝？」

「なんだ、がっかりしたか？ どっちにしても覚えてないんだから、もったいないことをしたって言ったんだ」 僕はしばらく呆然としていたが、すぐに気を取り戻した。 まあ、残念だったと言えば残念だったが、安心した。

「じゃあ、次の質問だ。僕の自転車でどこへ行ったんだ？」 これは結構気になる。

「病院。オヤジが入院してるんだ。おふくろは二年前死んじゃったから私が世話しないといけないんだ」 優希の表情が少し暗くなったような気がした。

「そうだったのか、それは大変だなあ。僕に出来ることがあったら、手伝うから、遠慮なく言ってくれよ」 優希のことが少しかわ

いそうになって思わずそう言った。その瞬間、一瞬だけ優希の顔に悪魔のような笑みが浮かんだような気がした…。

「そうか！　じゃあ、遠慮なく手伝ってもらうぞ。放課後、ウチに来てくれ。ってか、一緒に帰ろうぜ」　そう言うとき優希はさっさとペントハウスから降りて行った

「後片づけよろしくな」

5. 微笑みの答え

5. 微笑みの答え

ホームルームが終わると、優希が教室まで迎えにきた。早速、宮部がからかいにきた。

「色男は大変だなあ。毎日彼女の送り向かいだよ」 そんな宮地には目もくれず、優希は僕の腕を引っ張って教室を出る。

「おい、無視するなよ。俺とお前の仲じゃないか」 確かに宮部と僕は幼稚園からの腐れ縁だ。そうはいっても“親友”と呼べるほどの付き合いはない。教室を出たところで優希が立ち止まった。一目散に宮部の方へ歩いて行く。思わず宮部は頭を覆う。僕もてつきり勇気が宮部を引っ叩くと主思った。ところが、優希は宮部の腕を引っ張って連れて来た。

「手伝いは一人よりも二人の方がいい」 そう言うと、両手に花ならぬ片手にイケメン、片手に野獣よろしく二人の男を両脇に抱えて歩きだした。もちろん、イケメンの方が僕だ。

宮部は小学校から柔道をやっているだけあって、ガタイがデカくて、いかつい感じの男だ。幼稚園の頃はいじめられているヤツがいると、どこからか飛んできて助けてやっていた。そういう意味では正義感の強いヤツだ。

僕も、宮部ほどではないが体力には自信がある。宮部との決定的な違いは勉強ができるかどうかと、顔が女の子ウケするかどうかということだろう。宮部はどちらからといえば体育会系で男にモテるタイプだ。自慢じゃないが、学級委員長を務める僕は優等生。

校門を出ると優希はタクシーを拾った。

「おい、大丈夫なのか？　俺は金なんか持ってないぜ」　宮部が不安そうに言う。

「大丈夫だよ。これから働いてもらうのに、体力は温存しておかなきゃならないからな」

「いったい何を手伝わせるつもりだ？」　僕は昼休みに屋上で見た優希の悪魔のような微笑みを思い出して急に不安になった。

優希がタクシーを止めたのは駅前商店街だった。料金を払うとタクシーを降りて、『ついて来い』という優希の合図に従って商店街に入って行った。しばらく歩くと、優希が立ち止まり振り向いた。

「ここ、オヤジの店なんだ」　そこは、最近、開店したばかりのレストランだった。

優希の父親はそれまで努めていたホテルを辞めて、この春、ここに店を出した。二階と三階が住まいになっている三階建ての建物だ。ようやく軌道に乗ってきた矢先に持病の心臓病が悪化して入院するはめになった。

店に入ると、コックらしい若い男が二人で下拵えをしていた。

「あっ！　お嬢さんお帰りなさい」　そう言って深々と頭を下げた。

「今日はバイトを連れて来たから、こき使ってやっていいぞ」　優希はそう言うのと僕達の方を見てニヤリと笑った。

「とりあえず、これに着替えろ」　そう言って店の制服を二人に渡した。渡された服を眺めて宮部が僕に文句を言った。

「どう見たってこれはおかしいだろう」　宮部の服はコックの服だった。そして僕の服はウェイターの服。

「そうか？」　僕は苦笑いしながら話をはぐらかした。

「だいたい、なんで俺が手伝わなきゃなんないんだ？　手伝うなんて一言も言ってないぞ」

「いいじゃないか。昔から人助けは好きだろう？」

「まあ、困ってるヤツを見たら黙っちゃいられないが…」

「なら、いいじゃないか。早く着替えろ」

僕と宮部が制服に着替えて厨房に行くと、優希は若いコックに調理の仕方を指図していた。僕達に気付くと、そばに寄って来た。

「なかなか似合うじゃないか。もう予想はついていると思うが、デカイのには厨房を手伝ってもらおう。片桐はフロアな」

開店時間が近づくと、Tシャツにジーンズ姿の女性がやってきた。20代の後半だろうか…。彼女は優希に挨拶すると、僕をなめるように見て更衣室の方へ向かった。

厨房では宮部がジャガイモの皮を必死で剥いていた。柔道部の合宿では毎回大量のカレーを作っているだけあって、意外とうまくこなしている。既に汗びっしょりだ。僕はフロアの掃除とテールのセッティングを優希に指示されながらこなしていく。というより、はたかれながら覚えさせられている。さっき来た女性の従業員もフロアに出て来た。制服を着ると意外と美人に見える。

「さあ！ 店を開けるわよ」 優希が言うと、従業員たちは「はい！」と声を揃えて言った。僕は何か急に緊張してきた。

6. 優希の策略

6. 優希の策略

母親の声で目が覚めた。

「遅刻するわよ。早く起きなさい」

なんだかすごい筋肉痛と妙な気だるさを感じながらも布団を蹴飛ばしベッドから出た。制服を着て居間へ降りると、いつもの日常が戻ったような朝食のメニューが並んでいた。

「そうか、おふくろ帰ってきたんだな…」そう思いながら、トーストを1枚くわえてテレビの画面を何気なく眺めた。『おススメの1店』のコーナーだった。なんとなく見覚えのある風景。それは駅前の商店街だった。リポーターが入って行ったのは優希の父親がはじめた店だった。そう！昨日僕と宮部が優希に連れられて手伝わされたあのレストランだった。

リポーターが優希の父親の経歴を紹介しながら看板メニューのロールキャベツを紹介していた。ランチタイムを取材したようで、店内はOLやサラリーマンで溢れていた。僕は思わず、くわえていたトーストを口から落としてむせかえった。

「何してるの？早く食べちゃいなさい」おふくろの声が耳をかすめるけど、右から左に抜けて行った。僕はそのままカバンとトーストを2枚掴むと、そのまま家を出た。

学校に行く途中で宮部に会った。ボクが口を開く前に宮部が先に切り出した。

「なあ、け、今朝のテレビ、み、見たか？」宮部は興奮して少しどもっている。

「ああ！驚いたな」

「あいつのオヤジさんってすごいんだな」

「優希はあんまり口にしなかったけど…。道理で昨日は忙しかったはずだ。やっぱり知ってるヤツは知ってるんだな」　そう言いながら、僕は昨日の夜のことを思い出していた。

店が開店すると同時に店内はいついき満員になった。既に、行列も出来ている。僕は優希に連れられて注文を取りに店内を廻った。

「ヒメ、新人のバイトかい？」　常連客らしい中年男性が優希に声をかけた。

「まあ、そんなようなものね」　優希は軽く笑って見せると、次のテーブルへ移動した。

「なあ？ヒメって…」　僕が聞いても、優には何も答えずに次々にテーブルを廻る。

「私語は慎め！」　そう言って僕を睨みつけた優希の目を見たとき、僕は優希のことを正真正銘のプロだと感じた。

注文を取り終わる頃には、「最初の料理が出来上がって来た。僕はオーダーとテーブルナンバーを確認しながら次から次と料理を運んだ。汗だくになりながら龍利を運ぶ僕の横をヒトミさんは余裕で倍の料理を持ってスイスイ歩いて行く。

ヒトミさんというのは、開店間際にTシャツとジーンズ姿でやって来た女性従業員。彼女はオープン前から研修を受けてこの店にやって来ている、いわばプロのウェイトレスだった。

こんな調子で、結局閉店まで休める時間はほとんどなかった。第厨房にいた宮部は僕よりずっとキツイ仕事をさせられていた。第一陣が食事を終えて食器が戻ってくると、ひたすら食器洗い。手が開いたら、倉庫や冷蔵庫からひたすら食材を運ぶ。

店が終わった時には二人共ヘトヘトだった。僕は料理を運ぶのにふだん使い慣れない格好を続けていたため、腕が上がらないほどだった。腕力には自信のある宮部ですら値を上げるほどだった。

「コックがこんなに体力のいる仕事だったなんて知らなかったなあ」
そう言って宮部が床にへたり込んだ。

「お前らだらしのないなあ。でもまあ、しょうがないか。だけど
本番は明日からだから覚悟しておいてくれよな」 優希はそう言っ
てニヤリと笑った。

そう言うことだったのか！ 優希は今朝のテレビで店が紹介され
ることが分かっていたんだ。なんてこった！ 体が持たないぞ…。

7. つかの間の夢

7. つかの間の夢

僕と宮部はその後1週間、優希の店を手伝った。その間、学校では午前中の授業はほとんど寝ていた。

テレビ放映のおかげで店も今まで以上に客が来るようになった。二日目からは疲れて筋肉痛がする体を酷使して働かなくてはならなかった。それでも、辛いと思ったことはなかった。とはいえ、楽しかったかというところ、そう感じるほどの余裕もなかったと思う。

1週間経ったところには体も慣れてきて、これからバンバン働けると思った矢先、優希の父親が退院し、店に出られるようになって戻って来た。

国語の授業は相変わらず退屈だ。先生の前田は僕たちのクラスの担任でもある。そして、前田の授業は話がまるで子守唄のように聞こえる。授業が始まって10分もすると、僕は重たくなった瞼に抵抗することをあきらめてしまった。

あきらめた途端に、退屈だった授業は遠い世界へ飛んで行った。

そこはどこかのレストランだった。しかも見覚えがある…。

優希の店だ。

見慣れた従業員たちがあわただしく動き回っている。「店長、何ぼやっとな突っ立っているんですか！ 邪魔だからどいて下さい」

店長？ 僕は辺りを見回してみた。店長らしき人はどこにもい

ない…。店長と言えば、優希の父親しか思い当たらないけれど、その姿はどこにもない。

僕は、頭を冷やそうと洗面所に向かった。冷たい水で顔を洗ってふと鏡を見た。そこに映っている僕の顔を見てハッとした。バリっとしたスーツに身を包んで立派なひげを蓄えた中年の男がそこには立っていた。僕は目をこすって、もう一度鏡を見た。どうやらこれが今の自分の姿のようだ。

信じがたい気持ちをぬぐい切れぬまま、店の外に出た。ちょうどそこへ黒塗りの車が店の前にとまった。運転手が降りてきて後部座席のドアを開けた。僕は更に驚いた。

その高級車の後部座席から降りてきたのは優希だった。中年になった自分とは裏腹に、優希の姿は高校生の優希のままだった。しかし、その姿はいつもの優希と違って、高級そうなドレスに身を包み、大人びたメイクをしたどこかのお嬢様といった感じだった。「あなた、こんなところで何をしているの？」口を半開きにしてポカンと突っ立っている僕を見て優希がそう言った。確かに言っただ。 “あなた”と。

「もうすぐ閉店の時間よ。早く行きましょう」優希はそう言っていると僕の腕を引っ張って店の中に入って行こうとする。僕は何が何だか分からない。

「あら、忘れちゃったの？今日は私たちの結婚記念日よ。みんなが閉店後にお祝いをしてくれることになっていたでしょう」

「け、結婚記念日？僕たちは結婚しているのか？」

「何をバカなことを言っているの？さあ、早く行くわよ」

店に入ると、宮部がクラッカーを鳴らして僕達を迎えてくれた。「店長、奥様、20回目の結婚記念日おめでとうございます」と宮部。

「宮部？お前、ここで働いているのか？」僕がそう言うと、宮部は不思議そうな顔をした。

「もう、25年も一緒に働いているのに今更冗談はやめて下さい」

宮部はそう言って僕の背中を叩いた。相変わらず、加減を知らないやつだ。叩かれた背中がひりひりする。

その宮部の後ろで照れ臭そうに隠れているのはヒトミさんだ。その左手の薬指にはしっかりと指輪がはめられている。僕はまさかと思って宮部の左手を見る。同じ指輪が宮部の左手の薬指にもはめられていた。

「お前達、結婚したのか？」

「何を言っているんですか？ 同じ日に同じ場所で式を挙げたじゃないですか！」 宮部はそう言う僕に向かってでこピンをした。

「痛ってえー！」 僕は思わずそう叫んで額を抑えた。押さえた手を見ると、そこには白い粉が付いていた。

聞き覚えのある声に僕は我に返った。

「宮本、俺の授業はそんなに退屈か？」 そう言っておれた勅を持つて僕の前に立っていたのは国語の教師で担任の前田だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3888t/>

転校生の彼女

2011年10月18日12時00分発行